

---

# 真夜中

うすしお

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真夜中

### 【Zコード】

N44470

### 【作者名】

つすしお

### 【あらすじ】

真夜中は、昼とは別の、もう一つの閉じた世界。

主人公のマヤが過ごすある夜を切り抜き、とりとめなく並べ立てた話。自分には何ができるのか、または何ができないのか。夜の間に考えたこと。

マヤが部屋にたどり着いた。午前一時。バッグの中から鍵を取り出し扉にあてがう。入らない。また鍵を間違えてしまったのだ。「次からはちゃんとスマートに」 そう何度も何度も自分に誓つたはずなのに。

「不器用で進歩のない女。こんなの大嫌いよ」 その場にへたり込んでわめいてしまいたいのをこらえて、どうにか中へと駆け上がる。靴ならたぶん脱いだはず。泣きそう。上着だつて今は羽織つていから、きっと廊下でスパニエルの子犬みたいにくしゃくしゃになつてゐに違ひない。水に濡れた顔から雫がぽたぽたと落ちている。鏡の前にマヤはいた。泣きそう、だつて？ 違うよ、泣いてたんだ。顔を洗つたのはごまかすため。鏡に映つてゐる誰か知らない人、その人にばれてしまわないように。

吐いた。洗面台が黄色く染まる。酔つてないのに吐くなんて、ろくな物を食べてないんだ。水とかサブリメントばっかりだつたから。ヘルシーとかビューティーとか、そんな名前のケミカルな色。排水口にこびりつく。合成された嘘つぱちの色が。

水だけでメイクはすっかり落ちた。いいえ、落ちたことにしておく。それ以外のうまい方法がまるで思い付かない。

#### 『愛して』

たつたそれだけの単純な歌詞が、まるで歌えなかつた。古めかしくて陳腐な、ただの歌謡曲。バンドはいつもにも増していい音をくれていた。客も多少酔つてはいたけど、騒いだり暴れたりもせずに、静かに聞き入つてくれていた。なのに歌えなかつた。声だけが歌詞の上を上滑りに過ぎただけだつた。

恋ならいくつか知つてゐる。愛は知らない。

テレビを点けた。午前1時半。冷蔵庫からミニネラルウォーターを

取り出して飲む。それからサプリメント。吐いたあとじゃ食欲なんてちつともわからない。ボリボリ嚥んで、最後に水で喉を洗い流す。銃声がした。それは映画の中の出来事。中尉が撃たれた。彼の胸元に真っ赤な花が咲いていた。隊はリーダーを失った。そしてバラに壊れてしまった。

あの赤い花は、兄貴が集めていたのとよく似ている。父は母に、母は父に責任があるとお互い考えている。明るくて活発で、そして頭も良かつた兄は、ある日突然自分の部屋に閉じこもつたまま、一歩も外に出なくなってしまった。兄の部屋にはいつしか一匹の野良猫が住み着いて、その猫が花をせつせと集めては室内を飾り立っていた。そして家族はバラバラになつた。

マヤは外に出た。午前一時。街灯の光を避けて歩く。ぴょんぴよんと。大股で。

夜は好きだ。人間が誰一人もいなくて静かだから。もし誰かがいたとしても、それは黒くぼんやりした何かがあるだけ。いないのと同じ。

なにより素敵なのはあの傲慢な、微笑とともに天の恵みとやらをやたらに売りつけてくる、すかした大きな火の玉が見えないことだ。あいつはどうしようもなく下劣で最低だ。その強烈な光線がつくるコントラストが、胸が悪くなるほどにひどい陰影をあちこちに刻むから。私の体の誰にも見せたくないような凹凸を、自分でも目をそむけておきたい真実を、たちまち暴き出してしまっから。

河原に降りた。マヤがお気に入りにしている川沿いの公園。月が空の頂あたりに浮かんでいる。頬を優しく撫でる白い光のなか歌つてみる。

彼女は私の盟友で、戦友で、ほんとうに心を許し合える数少ない存在だ。その柔らかい光線は必要な分だけを、過不足なく照らしている。彼女も私も残り半分を隠したまま。それでも通じ合える。歌と光、会話ならそれで充分。

真夜<sup>マヤ</sup>。それが私の名前。私は闇。私は暗黒。私は夜。深く深く渴になつて墮ちていく黒。

歌を歌う。歌いたいから、ただ歌う。即興で、感じのままに。月は静かに聴いてくれている。

携帯が鳴つた。午前三時少し前。

「よお、元気か？ また歌つてんの？」 その彼の声ときたら、相変わらず気の抜けたようにだらしない。

「分かつてゐんだから邪魔しないで。だいたいビービーして掛けてくれるよ？」 もう『終わった』の、先々週で

大事な時間を邪魔されたことと、聞きたくもない彼の声とに、ビービーしようもなくいらっしゃる。現実に無理やり引き戻されたことについても。

「だからその『終わった』についてだな、少しふりに話をしたっていいじゃないか」

「いひちにはないの。あなたは嘘をついた。それでもうおしまい。それで決着」

「いいから聞いてくれよ。俺は変わるんだ。もう前とは違つ。この前新聞広告で、宇宙飛行士募集つてなつてたんだ。俺はやるよ。だつたら地球に待つててくれる女がいるとか。な、判るだろ？」

優しくて、楽しくて、いい彼氏だつた。少なくとも以前は。そしてそれは今まで付き合つた男の全員に言えることだ。再び彼の声。

「お前の歌がまた聞きたいよ。なあ、録音しておいてくれないか？」

宇宙じゃ真空があるから、音なんてまるで伝わらないんだ」

「の一週間ときたら十年ぶりに訪れた男なしの期間だつたから、正直な気持ちを告白するとしたら、それが誰であろうと、またどんな声だらうと、いんな会話が出来ることを嬉しく思えたのは確かに事実だ。

「あなたはまたそつやつて嘘をつく。あなたは宇宙飛行士になんてならないし、空の向いに真空なんてない。」 変わる」とか言って

るけど、それはせいぜい”気が変わる”って程度のこと。私には分かる。もう、ほんとうに終わり。って言つかもう終わつてる。……

：それじゃ

通話を切つた。空を見上げた。この先には目に見えない壁があるだなんて、そんなでたらめは絶対に信じない。

マヤがまた歌い始める。愛の歌を。この世には歌があつて、震えて伝わる空氣があつて、そして聴いてくれる人がいる。ましてや真夜中なら、髪の先から足の指にまで隙間なく夜の充填された彼女なら、あの月に歌声を届けるなどたやすいことだ。たとえ朝が来るまでの短い間だとしても、それ以外に何があるというのか。

(後書き)

人称がふらついていますが、あえてそうしていいますのでご了承ください。また、イメージ優先で細部についてはこだわらずに書きましたので、設定その他不明な点があつても、気にせずどうか流してやってください。

いくらか時間が経つたあと、ふとなんとなく思い出す、そんな話となつていれば幸いです。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4447o/>

---

真夜中

2010年10月22日10時06分発行